

関連学会印象記

第5回日本心臓血管麻酔学会学術大会・総会

野村 実*

第5回日本心臓血管麻酔学会学術大会・総会 (5th Annual Meeting of The Japanese Society of Cardiovascular Anesthesiologists) は、2000年9月15日(金)・16日(土) 国立循環器病センター手術部長、畔政和先生を会長として千里ライフサイエンスセンターで行なわれた。プログラムとして、特別講演にはコロンビア大学 St Luke's Hospital Center の Daniel M Thys 教授が経食道心エコーの心臓麻酔における clinical decision making について発表された。アメリカでは心臓麻酔医が術中診断医として活躍していることがあらためて認識された。経食道心エコーの分野の発展は著しく、この領域を推進してきた学会としては最適な講演であった。ほかに、小児心臓麻酔のモニターについてなどの各種シンポジウムがもりだくさんに組まれていたが、いずれも焦点がしっかり絞られていて、一般演題も含めて討論が盛んに行われて、会場は熱気にあふれていた。参加者は600名近くへのほり、正会員1000名のなかで60%ちかくの麻酔科医が参加する活動的な学会であった。

ワークショップは、非心臓手術の術前評価と予後、小児心臓手術におけるモニタリング、破裂性腹部大動脈瘤の管理、人工心肺管理の実際など即戦力的な臨床の up to date の話題が多く、大変参考になった。演者に若手の先生が多く、経験豊富な司会の先生とうまく調和が取れ、また循環器内科医や心臓外科医のコメンテーターも多く、手術手技と密接な関係がある心臓麻酔学会ならではの素晴らしい企画であった。

また、ディベートとして、心臓手術のフェンタニールは少なくてよいか、虚血性心疾患の人工心

肺離脱時にカテコラミンは使うべきか、低体温か常温体外循環か、虚血性心疾患合併患者の麻酔導入法として何が適切か、早期抜管早期覚醒は良いのかなどがとりあげられた、会長より、<2手に分かれ自己のデータもしくは文献により討論をします。演者は最後まで自説を曲げないで討論を楽しむことを原則とします>という指示が各演者に出され、活発な討論が行われた。このような新しい試みは会員を刺激するいい機会であった。欧米とは異なり、演者がまだこの方式に不慣れな点も見受けられたが、ある種の演技?も行いながらいかに会員にインパクトを与えていくかという意味で、今後このような企画がふえることを期待する、

教育講演としては、循環器領域に長年の経験がある畔先生の豊富な人脈を生かし、循環器疾患の画像診断、不整脈の外科手術、心筋保護など豊富な内容であったが、2日の学会ではとても収めきれないのが残念であった。また、今回の試みとしてエコー症例検討会のビデオによる応募症例の検討会があり、従来の心エコーセミナーとともに充実していた。Computer presentation も多く見受けられ、特に心エコーなどの動画による講演は楽しく興味が湧き、来年以降もこのような傾向は加速されると思われる。

第1回から行われている経食道心エコー Workshop (TEE Workshop) は今回は循環器病センターの麻酔科医、内科医、外科医を含めた豊富な人材と日本心臓血管麻酔学会の経食道心エコー委員会の合同で行われ、名実ともに high grade な Workshop となった。ただ、胸壁心エコーの部分も多く、会員のアンケート調査をみると、従来の TEE Workshop をもう少しとり入れてほしい意見も強く、次回は多少再検討して開催される予定で

*東京女子医科大学医学部麻酔科学教室 日本心臓血管麻酔学会事務局長

す。欧米におけるこの領域の進歩に連れて、年々参加者のレベルも上昇し、症例の深い検討が中心課題となってきた。一方では、心臓麻酔だけに専従できない日本での現状、また研修医を含めた TEE の経験が少ない先生もいるのをふまえながら、TEE Workshop の内容を検討していきたいと思えます。2002年の麻酔学会（九州大学 高橋教授）やイスラエルでの第8回国際心臓血管麻酔学会、2003年の胸部外科学会とでは合同 TEE workshop も企画されており、2004年の第9回国際心臓血管麻酔学会（慶應大学 武田教授）にむけてますますこの分野の発展が期待される。

また、本大会で使用された audio response system は会場の聴衆に質問して、その答えを提示しながら進めていくもので、聴衆参加タイプの楽しくしかもインパクトの強い講義内容になった。また、機器が高価なようであるが Computer presentation との組み合わせでその場で質問を作製することも可能でその集計もでき、アンケート調査を軸としていくこの学会ならではの企画であり、畔先生の慧眼に敬意を表したいと思えます。

また、学会演題の応募方法としては、ホームページ (<http://www.jscva.org>) もしくはフロッピー（テキストファイル）または電子メールでの応募のみとなった。学会誌も PDF による電子化が進みま

さに電子学会のはじめとなる学会である。

このように、いくつかの将来への提言を見越した学会で、どの会場も満員で立ち見が出るほどであり楽しい2日を過ごすことができました。会長の畔 政和先生、事務局長の内田 整先生はじめ国立循環器病センター麻酔科医員の皆さまの御苦労に感謝します。

最後に昨年12月7日、本学会の創設者であり理事長である、東京女子医科大学名誉教授藤田昌雄先生が突然の脳出血のため、1週間の闘病生活の後逝去された。謹んでご冥福をお祈りいたします。事務局としては、大学や一般病院の枠にとらわれずに学会を組織し、真に心臓麻酔の発展を願い、本学会をこよなく愛されていた先生のご遺志をつらぬきたいという思いでいっぱいです。日本循環制御医学会会員をはじめとする関係各位の皆様のご協力をお願いいたします。

なお、来年は北海道大学大学院医学研究科高次診断治療学専攻侵襲制御医学講座侵襲制御医学分野教授劔物 修先生を会長とし、2001年10月5日（金）～6日（土）会場かでの2・7（札幌市中央区北2条西7丁目）にて、2002年には神戸市民病院加藤浩子先生が会長で神戸において開催が決定されている。